

科学的認識論について——あとがきに代えて

科学的認識論とは「科学的認識とは何か、いかにすれば、正しい認識に達することができるか」ということを明らかにしようという哲学である。科学的認識論を考えることにはどんな意義があるのだろうか。

討論重視・探求重視の教育潮流

最近、討論の重要性が強調されるようになった。しかし、討論をさせる授業には大きな問題が潜んでいる。

たとえば、「最近少年犯罪が増えているから、少年法の見直しが必要だ。」という意見がある。この意見を取りあげて、授業で少年法の見直しが必要か、不必要かを討論させることを考えてみよう。授業で扱えばさまざまな意見が出てくるだろう。しかし、この授業では大きな問題が見過ごされている。実は「少年犯罪が増えている」ということは事実でないのである。事実、少年犯罪は年々減っているのである。この間違っただけで討論させるということは、まったく無意味なことをやっているのである。前提から間違っていることは議論するに値しないのである。討論が大切と称してこのような有害無益な教育がなされているという実態があるのではないだろうか。

探求的学習が大切だという主張もされている。これもかつて繰り返された主張である。しかし、少なくともこれまでの探求学習は成果をほとんど挙げてこなかった。子どもたちにいろいろ探求させ、調べさせても、そこから科学は生まれて来なかったのである。

科学的認識論の軽視

この2つの例はいずれも、科学的認識論に対する軽視がもたらした失敗である。「科学的認識には討論が不可欠である」「科学的認識を育てるためには探求する態度を養わなければならない」いずれも、その限りでは正しいように思える。そこで、討論させる授業や探求させる授業が

大切だと言われるようになったのであろう。しかし、科学的認識は討論していれば成立するのではない。探求していれば成立するのではない。討論も探求も科学的認識の一つの側面を述べているに過ぎない。科学的認識の成立条件について確かな考えを持たない限り、そこから導き出される教育方針はおかしな結果をもたらすのである。

科学的認識論の研究が必要な理由はここにある。

科学的認識は仮説実験的にのみ成立する

科学的認識はどのように成立するのだろうか。科学的認識は仮説実験的にのみ成立するのである。討論や探求だけを取り出して授業に組み込もうとしても、それが科学的認識を成立させる条件を持っていなければ、科学的認識は成立しないのである。

われわれは個々の問題にどう対処するかという場合には、仮説実験的に考えなくてもそれなりに対処していけると言える。しかし、大きな方針を策定しようとするときには、そうしたやり方では大きく道を踏み外してしまう。

テストに出る問題にどう対処するかどうかだけを考えるときには、仮説実験的に学んでいなくても何とか対処できる。しかし、もっとも基本的な問題を解決しようという時には、仮説実験的認識論の立場に立たないと一歩も前に進めない。多くの高校生が入試問題の解き方を学んでいるが、その多くはその根本にある考え方を理解していない。これでは創造的な人材は育たない。

われわれが教育を通じて育てたい人間像は、根本的な問題で大きく間違えたりしない人間である。それにはどうしたらいいか。それには仮説実験的認識論にもとづく教育をするしかないのではないかと思うのである。

現在のさまざまな教育方法の提唱者も仮説実験的認識論の立場に立てば、討論重視や探求重視という一面のみを強調した方法を提唱したりすることはなかったであろう。